第12課　善をもって悪に勝つ

【暗唱聖句】

「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。」ローマ12:2

【今週のテーマ】

今週は、キリスト者としての日々の生き方について学びます。

【日曜日・なすべき礼拝】

「こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」ローマ12:1

パウロは何が真のなすべき礼拝なのか語っています。それは自分の体を神に喜ばれる聖なる生きるいけにえとして献げることです。これがなすべき礼拝だと言っています。古くからユダヤ人たちは動物をいけにえとして捧げてきました。しかし、パウロは自分自身の体をいけにえとして捧げなさいというのです。神を信じて生きるとは、他人ごとではない、まさに自分自身を犠牲にして捧げるような真剣な生き方が求められているのです。

　神殿で犠牲として献げられるいけにえは、しみや傷があってはなりませんでした。つまり特別な清さが求められました。同様に、神様のご用のために自分自身を捧げるというのは、自分自身が清いものでなければならないことを意味しています。それゆえキリスト者の生き方は「聖なる」いけにえなのです。

 　そして、同時に「生ける」いけにえとも呼ばれます。動物犠牲は献げられるときには生きていますが、祭壇で屠られたあとは死んでしまいます。しかし、キリスト者に求められていることは、「生きた」いけにえとして、神に仕えることです。そして「礼拝」という言葉の本来の意味は、「仕える」「奉仕する」という意味なので、キリスト者の生涯は自分を捧げて神に仕え、神に奉仕する生き方であり、その生き方そのものが神への礼拝となっているべきなのです。

「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。」ローマ12:2

さらにその生き方は、「この世」に倣うものではなく、神様の御心に生きることが求められています。だから、何が神様に喜ばれることなのか、何が神様からみて完全なことなのかを聖書のみ言葉を通し、また祈りを通し、聖霊の助けによって、わきまえていくことが大切です。迷うことなく、神様の御心のみを生きるものでありたいものです。

【月曜日・慎み深く評価する】

「わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです」ローマ12:3

パウロは信仰と行い（十戒）との関係において、様々な角度から多くのことを述べてきましたが、しかしそもそもその背後にある大切な精神を忘れてならないことを思い出させます。それはもちろん愛の精神です。信仰か行いかと議論しながら、お互いの愛、憐れみや尊敬しあう心を忘れて、どちらが正しいのかと主張しても意味がありません。

　パウロはまず「自分を過大に評価してはなりません」と言います。これは謙虚さを教えています。愛の精神は自分を謙虚なものへと変えます。そして、「兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい」（ローマ12:10）と続けます。謙虚な人は相手を尊敬し、相手の優れたところを見ようとします。この精神を忘れると、自分は正しく、相手は間違っていると、ただ互いを批判しあうようになってしまいます。信仰による義という聖書の教えの根幹をなすような重要なテーマの議論でさえ、そこには常に謙虚さと相手を思いやる心が大切なのです。そもそも信仰による義とは、自分の無力さ、罪深さを認める態度であり、神様の恵みの中にすべてをお委ねして生きることなのですから、真に信仰による義を悟る者は、他者よりも自分が優れているなどとは思わないものなのです。

【火曜日・クリスチャンと国家】

「人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです」ローマ13:1

ローマ帝国によるクリスチャンの迫害がある中で、パウロは「上に立つ権威に従うべき」であり、それは「今ある権威はすべて神によって立てられたものだから」だと語っています。極端な独裁国家でもないかぎり、このパウロの言葉はどの国にも当てはまることでしょう。従って、クリスチャンはその国において良い市民であるべきというのが聖書の教えです。その国の法律に従い、きちんと税金を納め、すべきことをするのです。そうするなら、無用なトラブルも避けることができるでしょう。

　しかし、もしその要求が神様のご要求と矛盾するときは、神様を優先しなければなりません。ここに信仰の闘いがあります。

【水曜日・互いに愛し合いなさい】

「互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあってはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです」ローマ13:8

パウロは互いに愛し合いなさいと言います。それは愛は律法を全うするからです。信仰によって義となるからといって、愛を生きることを通して律法を全うするという生き方が破棄されたのではないことがわかります。愛を生きることは、クリスチャンとしての生き方の問題です。信仰によって義となるとは、クリスチャンとしての救いの問題です。両者は矛盾することなく、互いに麗しい関係にあるのです。

「『姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな』、そのほかどんな掟があっても、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されます」ローマ13:9

パウロは「隣人を自分のように愛しなさい」と語っています。この言葉は、イエス様が語られた言葉でありますが、またこの言葉は旧約聖書のレビ記19:18の中でも主が語られた言葉でもあります。

「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である」レビ記19:18

つまり、律法の行いを中心にしているかのように思える旧約聖書の中でも、互いに愛することの大切が説かれているわけです。なぜなら、語っている主は旧約も新約も同じだからです。そしてパウロはここで再び、このみ言葉を引用して、何が一番大切なことなのかを教えているのです。

【木曜日・救いは近づいている】

「更に、あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです」ローマ13:11

パウロは愛の大切さを説いた後、更に言葉をつづけたのは、「眠りから覚めるべき時が既に来ている」ということでした。なぜならば少なくとも、信仰に入ったころよりも、救いが近づいてきているからです。この場合の救いとは再臨のことだとすれば、今の時代はなお一層再臨が近づいてきていると言えます。そのような時の切迫感が眠りから覚めることをわたしたちに促してきます。では眠りから覚めるとは、具体的にどのようなことを言うのでしょうか。パウロはこう続けます。

「夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう。日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません」ローマ13:12～13

眠りから覚めるとは、闇の行いを脱ぎ捨てること。すなわち酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨てることです。そしてその代わりに光の武具を身に着けよと言います。それはすなわち主イエス・キリストを身にまとい、品位をもって歩むことです。